

若手教師・教育創造MTG ミーティング

第4回オンラインミーティング&有志メンバーによる「挑戦の会」・レポート

仲間との対話で得た気づきや意欲を、 自身の教育活動へとつなげる

全国の若手教師が地域を超えてつながり、これからの教育について語り合う「若手教師・教育創造MTG」。今回は、4回目を迎えたオンラインミーティング、そして、オンラインで行われた有志による対話「挑戦の会」についてレポートする。若手教師がそれぞれの課題や思いを語り合うだけでなく、そこで得た学びやモチベーションを具体的な行動につなげる動きが進んでいる。



レポートその1 第4回オンラインミーティング（10月下旬実施）

全国の若手教師が互いに語り合う中で、
新たな課題に気づく高い視座を獲得

若手教師が問う
生徒の「自走化」と「自由」

今回のオンラインミーティングも、2人の教師の問題提起（囲み参照）から始まった。テーマの1つは、「生徒の『自走化』」だ。発表者の教師が、まず、「生徒には、2年生になる頃から、大学受験を念頭に、目標と現状とのギャップを意識しながら

主体的に勉強してもらいたい。そのため、1年次から教科別にドリルの取り組み目標を段階的に示している。だが、生徒の主体性を育むには、そうして教師が手をかけるだけでなく、生徒に時間の使い方を委ねるべきではないかという葛藤がある」といった率直な思いを語った。そして、「自走する生徒を育てるためには、育成を目指す資質・能力と

私の教育活動 **喜** **怒** **哀** **楽**

テーマ1 ● 低学年次の進路指導

生徒の「自走化」を促すために
北海道・私立札幌第一高校 佐藤亮介先生

先生方と考えたいこと

- ① 生徒の自走化を促すために、どのようなことを意識すればよいでしょうか？
・提示した本校の事例は進路指導の側面が大きいのですが、探究活動においても自ら主体的に活動を進めることが大切なと思います。
・課題発見・計画・実行力を進路や学習などにも転移させるために何か意識していることはありますか（あるいは自ずと転移するものなのでしょうか）？
 - ② 3年間の指導のバックボーンとなるグランドデザインはありますか？
・教育目標、進路指導、探究活動、特別活動で身に付けさせたいのとそれぞれの教育活動を結び付けたグランドデザインはありますか？
・ない場合は前年課題や日頃の目標合わせが断片的な「指導の流れ」になっていると思いますが、そうした目標合わせ、どう進めていますか？
- 大嘗社儀であり、現実には目の前の生徒を相手にしながらではありますが…少しでもお知恵を聞えれば幸いです

佐藤先生
の
思い

教科学習や探究学習で生徒の自走化を促すためには、どのようなことを意識すればよいのか。高校生活で育成を目指す資質・能力を様々な教育活動で獲得していくことを、生徒に自覚させるグランドデザインが必要ではないか。

佐藤先生の発表に対する意見・感想

- ◎育成を目指す資質・能力を、教師だけでなく生徒とも話し合い、共有することで生徒の同意を得て、目指すものを合致させることが自走化の鍵ではないか。
- ◎生徒が目標と現状の差を知り、希望進路を諦めようとする頃合いを見極め、教師が勇気づけることも自走化には必要。自走させながらも教師が伴走することが重要だ。

私の教育活動 喜怒哀楽

テーマ2 ● 多様な社会人との対話

生徒が本当の意味で自由を手に入れるための教育

宮城県村田高校 清水絢子先生



清水先生の思い

生徒の自己肯定感を高めるきっかけの1つとして、多様な社会人との対話の場をつくってきた。さらに、非認知能力の育成を視野に入れた定期考査のあり方や、校則の見直しなども含めた生徒主体の学校づくりを模索したい。

清水先生の発表に対する意見・感想

- ◎本校でも、社会人講話の後に小グループでの対話の時間を取り入れ、ただ話を聞くだけで終わらせない工夫をした。生徒が自分の思いを率直に語る場がもっと必要だ。
- ◎校則の改正は生徒の主体性を育む活動になり得るが、そうした活動に対して抵抗感がある教師もいる。生徒の活動に対する教師側の共通理解が欠かせない。

教育活動の関係を、教師と生徒の両方が理解するためのグラウンドデザインが必要ではないか」という問題提起がなされた。

もう1つのテーマは、「生徒が本当の意味で自由を手に入れるための教育」だ。発表者の教師は、「とりあえず就職先が決まればよい」「定期考査に出る問題が解ければよい」といった考えの生徒が、自分の可能性に気づき、チャレンジ精神を持つことができるようになるための教育を「自由を手に入れるための教育」と捉え、地域の社会人や大学生との対話の場づくりや地元企業の見学な

どを行ってきた経験を披露。その上で、次の課題として、『人はよりよくなる』ということを認識できるように定期考査のあり方」などについて本ミーティングのメンバーに問いかけた。

他者との対話を通じてマクロな視点を得る

4回目を迎えたオンラインミーティングでは、メンバーから「生徒が非認知能力をメタ認知できるようにするために、どのような仕掛けが必要か」「生徒の主体的な学びを

促すグラウンドデザインとはどのようなものか」など、これからの学びのあり方につながるマクロな視点の問いかけが目立ったが、それは、本ミーティングを通じて、若手教師たちが高い視座を養ってきたからだろう。実際、メンバーからは、これまで

促すグラウンドデザインとはどのようなものか」など、これからの学びのあり方につながるマクロな視点の問いかけが目立ったが、それは、本ミーティングを通じて、若手教師たちが高い視座を養ってきたからだろう。実際、メンバーからは、これまで

互いの活動に刺激を受けながら、新たな「生徒の振り返り」に挑戦

新たな振り返りの場を設けて生徒の行動を変える

前号の本コーナーでレポートした、本ミーティングでの活動を全国の高校教師への「提案・提言」としてまとめるための対話も続けられている。「提案・提言」を実践的なものとするため、メンバーが対話の中で得た気づきや学びを各自の現場での活動に落とし込み、その成果を語り合う試みとして、「挑戦の会」という場が10月上旬に設けられた。今まで生徒の振り返りが十分ではなかった活動について、新たな振り返りの機会をつくることに挑戦したメ

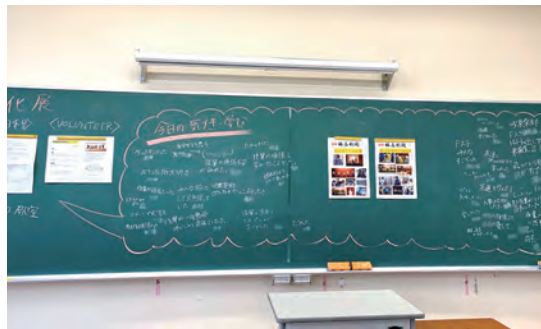


写真 1・2年生が中心となる学校祭だが、3年生も何らかの気づきを得られるように、黒板を使って振り返りを試みた。これまで気づかなかった人間関係が見えるなど、思わぬ成果もあった。

での活動の成果を振り返る中で、「他校の先生方と話す中で、それまで自分が気に留めていなかった事象の中から課題を見つけられるようになった」「未来の教師像や学校組織のあり方などにも興味を持つようになった」といった声が上がっていた。

レポートその2

有志メンバーによる「挑戦の会」〈10月上旬実施〉

ンバーのうち、2人の教師の実践報告を紹介する。

実践者の1人である富山県立南砺

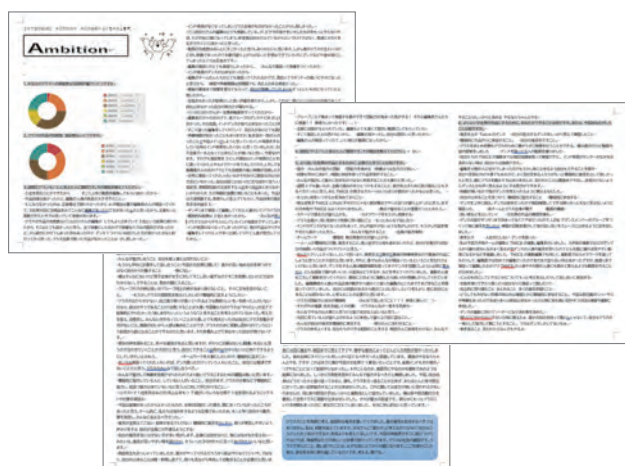
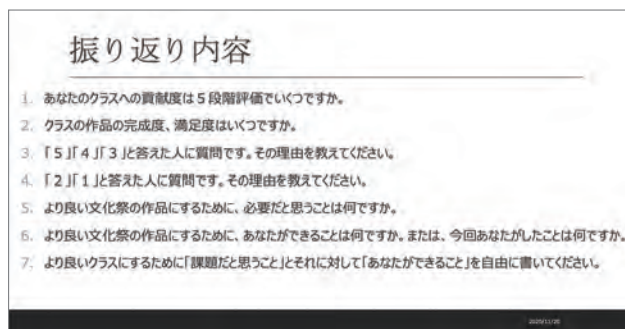


図 振り返りの内容は後日クラス全体で共有することを伝えた上で、生徒に振り返りをさせ、その結果を Classi に入力させた。振り返りの意義を丁寧に伝えたことで、生徒たちは他者批判を行わず、自分が改善すべきことを挙げた。

福野高校の石黒佳奈先生は、担任を務める3年生のHRで学校祭の振り返りを行うことにした。学校祭当日、多くの3年生は校内での発表を参観した後、教室で自習に取り組みのが通例だが、「学校祭を通して感じたこと、気がついたことを後で振り返ろう」と前もって伝えることで、生徒の1日の過ごし方が変わるのではないかと石黒先生は考えた。

学校祭当日の朝のHRで、石黒先生は、「下校までに、今年の学校祭での気づきを、少なくとも1人1つは教室の黒板に書いてください」と

生徒に振り返りを促した。例年、3年生の中には、学校祭の様子を参観せず、教室で自習を続ける生徒がいるという。しかし、今年は、振り返りの呼びかけが功を奏したのか、教室に残る生徒は見られなかった。黒板に書かれた振り返りからも、ダンスを披露したクラスメートの姿をたえる言葉を中心に、3年生であっても同じ高校の生徒として学校祭を楽しむ様子が見られた（P.61写真）。

「私は、今年度初めて3年生のクラス担任を務めています。受験生のクラスということ、緊張感を持つ

て日々クラス運営にあたっています。が、本ミーティングの先生方からいただく刺激によって、チャレンジ精神を忘れずにいられています。今回の振り返りも、受験生であっても学校行事に前向きに参加する仕かけがつかれないかと考えたことが発端ですが、背中を押してくれたのは『挑戦の会』のメンバーでした」（石黒先生）

分断されたクラスに つながりを取り戻す

もう1人の実践者の三重県立神戸高校の森田歩美先生も、担任を務める2年生のクラスで学校祭の振り返りを行った。森田先生のクラスは、学校祭の準備段階で生徒間の話し合いが円滑に進まず、計画した出し物が中止になるなど、生徒が当初期待していた学校祭にはならなかった。その後、学年全体で行った振り返りでは、安易にクラスメートを非難する言葉が出るなど、クラス内の生徒間の分断を感じていた森田先生は、クラス独自で改めて学校祭を振り返る機会をつくろうと考えた。

うまくいかなかった原因を、他者にだけでなく、自分にも焦点をあてて考えてみると、クラスのためにできたことがあったのではないだろうか。「よりよいクラスにしていくなために、今回振り返った内容をみんなで共有しましょう」と呼びかけ、Classi（*）での投稿を求めた。「全員がクラスのことを考え、建設的な意見を出してくれました（図参照）。振り返りの意義が伝わったからこそ、自宅でスマホを使い、クラスメートの顔が見えない状態であっても、他者批判することなく、真剣に振り返りに取り組んだのでしよう。生徒も、クラスの雰囲気自分たちの力で変えたいと思っていたのかもしれない」（森田先生）

クラス独自の振り返りを行わなければ、生徒たちは学校祭での経験を肯定的に捉えることができなかっただろうと森田先生は語る。担任として何らかの働きかけが必要であることは感じていたが、石黒先生同様に、森田先生の背中を押したのは「挑戦の会」の存在だった。

若手教師が刺激を与え合い、取り組む様々な挑戦が、「提案・提言」の形に昇華することが期待される。

* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社提供。学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。